

NEJIREBANE, No. 87, 15. Jun. 2000

中根猛彦先生を偲んで

澤田高平

中根先生が名古屋大学から西京大学（現在の京都府立大学）に赴任されて間もなく、大阪で同定会が開かれた。その席上で手帳に *Neopallodes* と書いて教えて頂いたのが、お会いして最初であったと思う。その後は先生の研究室によく伺って、記載の方法や文献の見方など、直接指導を受けることで、分類学の実習を積むことができた。その当時、中根先生は保育社の原色昆虫図鑑の仕事がされておられたが、私も一部分担を許されたので、その結果、比較形態学の要点をさらに理解するのに役立ったと思う。その他、ハネカクシ科の共著の仕事や北海道への採集旅行に同行させて頂いた。しかし、このような幸運は長くは続かず、先生は国立科学博物館に突然転任が決まり、私はその後、先生に長くお会いすることがなかった。次にお会いしたのは、故吉井良三先生のもとでヒゲブトハネカクシ亜科の剛毛配列等の研究論文の審査の折り、学外審査員として京都にお越し頂いた時である。その後東南アジアの材料を中心に自分としては満足のいく研究を展開できたのも、中根猛彦先生のご指導の賜と深く感謝申し上げ、同時に哀心よりご冥福をお祈り申し上げます。（さわだ こうへい）

中根猛彦先生の逝去を悼む

穂積俊文

昨年5月末、大澤省三氏から中根先生死去の連絡を受け、早速御遺族にお悔やみを申しあげた。12月になって、今年は多くの甲虫屋が亡くなられたと感慨にふけた。中根猛彦・平田信夫・野村 全

・高橋壽郎・石田正明・三輪勇四郎と頭に浮かんだ。中でも中根先生には最も長く御指導を受けた。

1942年10月、名古屋帝国大学理学部生物学教室に中根先生は赴任され、翌1943年4月18日(日)に初めてお目にかかった。当時「愛知の昆虫同好会」というのがあり、その談話会の席である。私は旧制中学生で、日記にはノーブルな方と一行だけ記してあった。そして、記念写真(残念ながら紛失)には江上信雄氏(故人、元東大理学部動物学教授)、大澤省三氏などの姿が見える。しかし戦争は激しくなり、昆虫採集どころではない時代となった。

戦後、「お帰りのさい」「やあ八高ですか!おめでとう」の言葉を交わしたのは、岐阜市の名和昆虫研究所だったと思う。「1946年1月6日、第一回昆虫座談研究会を開催します」の広告を昆虫世界で見て、名和氏宅へ出掛けた。先生は坊主頭で、私は白線帽を被っていた。以後、名大生物学教室や、先生の下宿(名古屋市覚王山)を訪れた。お部屋には三和銀行創始者(先生の祖父?)の揮毫書が額に飾られていた。大学ではタイプライターで文献を盛んに写しておられた。そして、標本箱を三和銀行地下室に保管していて、戦災を免れたと話された。この箱は5年後の京都への引っ越しでは、ご自身でリュックサックに入れて、列車に揺られ何回も往復されたと聞く。名古屋市内のラミーカミキリ発生地に案内申しあげたのも、この頃であった。

1951年に西京大学(現京都府立大学)に転任された後も時々お伺いした。叡山電鉄出町柳駅近くのお宅をお訪ねし、当時幼稚園児ぐらいのお嬢さんをお見受けした。現在、愛知県豊川市にお住まいの方であろう。また、塚本珪一氏や堀尾貞太郎氏(サンブククロナガオサ・カタモンチビオオキノコなどの発見者)を紹介された。更に、国立科学博物館に転ぜられた。学園紛争華やかな頃は、東大赤門前のご自宅のマンションで標本を見て戴いた。私が同定を受けた標本で印象深いのは、ヤマトヒメメダカカッコウムシである。革を叩くと落ちると説明すると、「採集では素通りするような所ですね、灯台もと暗いですね」と。朝比奈先生は以前採ったことがあるが、まさか新種とはと学会場で私に囁かれた。鹿児島、宮崎とお移りになった後は、賀状のやり取りのみだった。唯一の事は日本昆虫学会東海支部報のコピーの依頼があり、お送りして大変喜ばれた事であった。糖尿病を患われておられると聞いていた。晩年の眼病・足の疼痛・腎障害などの症状はすべて糖尿病起因と想像していて、色々な人々の追悼文に書かれている様子から想像に難くない。追悼文を挙げてみると、佐賀昆虫同好会(市場利哉)、北九州昆虫趣味の会(大平仁夫)山陰むしの会(門脇久志)、千葉県昆虫談話会(松井安俊・斉藤洋一・直海俊一郎・大塚市郎)、昆虫と自然(大原昌宏443号・佐々治寛之444号)、月刊むし(直海俊一郎)、名古屋昆虫同好会(穂積俊文・高井 泰)の以上11氏による追悼文である。断っておくが、編集者が集めた追悼特別号ではなく、各自が自発的に投稿している。昆虫界でこれほど多く、全国の人々から悔やみ文を送られた人は少ない。ご冥福を祈る。



第11回日本鞘翅目学会
(1986年11月9日:於東京・芝機械会館地下)

中根先生ありがとうございました

塚本珪一

先日、先生もご存知の京都府立大昆虫学研究室の「昆智貴会」50周年を開催しました。恐ろしく真面目で、宴会の前に現役と卒業生の研究発表がありました。

先生が府大にこられて京都周辺の甲虫研究が活気を帯びたことも事実でした。私も先生のそばに学生用の机を置いて、厳しいご指導でニッポンモモプトコバナカミキリの図を描くことができました。後にも先にもこの図だけが私の貴重な作品です。

先生のおかげで甲虫学の一端を学習できたことを嬉しく思っています。いろいろと厳しく叱られたこともよい思い出です。1999年12月の日本甲虫学会の総会で、先生の厳しかったことをハネカクシの澤田さんと回想していました。先生の住まわれていた京都の養正小学校のあたりは今もほとんど変わっていません。

現在、私もフン虫の分布という狭い領域で何とか研究らしいものをしています。縁があって故・河野伊三郎さんの標本の一部を使わせていただいております。河野さんの地道な調査に感動しています。私たちの糞虫図鑑は発行が遅れていますが、ぜひ先生に見ていただきたかったものです。ありがとうございます。(つかもと けいいち)

名古屋大学時代の中根猛彦先生

大澤省三

私が、はじめて中根先生にお会いしたのは半世紀以上も前の1943年4月8日、私が旧制中学の2年か3年の時である。当時、愛知の昆虫同好会の主幹、服部広吉さんが、名古屋の石川橋でトゲナベバタムシの採集を兼ねて、同氏宅で開かれた談話会の時であった。穂積俊文さん持参の甲虫標本を眺めておられる若き日の中根先生をとらえたその時の写真が残っている。穂積さんも私も甲虫の名前を調べるには、三省堂の神谷一男・安立綱光著や平山修次郎著の甲虫図譜くらいに頼る外なく、小さな甲虫はほとんどお手あげであったが、中根先生は次々と名前をつけていかれた。すごい先生だなあと驚いた記憶がある。中根先生は、1942年東京帝国大学理学部動物学科を卒業、同年10月名古屋(帝国)大学理学部生物学科の助手(後に講師)として赴任されているので、名古屋へ来られて間もなくの頃であった。

東大の学生時代には、九竜虫(キュウリウゴミムシダマシ)の変態に関する実験形態学的研究をやり、名古屋でも少しは続けておられたようである。私は中学の頃から高校(旧制八高)時代にかけて甲虫の採集に熱中し、信州島々谷～上高地、木曾ヶ駒岳、紀伊半島などを歩き廻った。採集品の不明種を次々と中根先生のところへ持ち込んだ。千種区覚王山の坂を南へ下った御自宅にしばしばお邪魔したというより入り浸りで、時には厚かましくも泊まり込みということさえあった。さぞ御迷惑だったろうと思うが、先生はいやな顔一つせず丁寧に標本を見たり、話し相手になって下さった。しばしば「これ、持っていないでしょう。あげます。」と言って、美しく作られたフサヒゲルリカミキリなどの標本をくださった。私がお目につけたものの中で、島々谷で採集した大型のハナカミキリがあり、図鑑に出ていない。先生はこれは大珍品ですよと言って、*Leptura bodemeyeri* PIC ヒゲブトハナカミキリと同定ラベルをつけて下さった(現在は *Pachypidonia* に移されている)。

やがて戦争が激化し、先生は教育召集で日向高鍋の部隊へ入られたが、暇をみて昆虫採集をしているという葉書をいただいた。この時の採集品の研究結果は、戦後間もなく発行された昆虫世界に「日向高鍋産甲虫類小録1-4」(1945-6)と昆虫学評論(1950)にその5として出ている。

やがて終戦、中根先生も名大に帰られたが、生物学教室は焼失しており、間借りの時代がかなり長く続いた。私の方も、戦災で八高が焼けたりしてまともに授業を受けたのは3年間の高校生活中、1年半くらいだったので、虫採りに熱中することができた。三重県湯の山付近の甲虫相を調べようと、時期になると毎週のように出かけ、御在所岳にはかれこれ30回近くも登った。1947年6月1日、御在

所岳から武平峠へ抜けたが、峠近くの樹林で人糞を発見、図鑑にはないマグソコガネを 2 種採集した。早速先生のところへ持ち込んだところ、一見して「これは両方とも new ですよ」と。この 2 種は後に野村 鎮、中根両氏によって正式に記載された (Kontyû, 19, P.35, 1951)。タイプはすべて上記の私の採ったもので、*Aphodius (Acrossus) unifasciatus* と *A. (A.) superatratus* である。なお、この論文では、後 (1947) に私が岩魚止～徳本峠間で採集した *A. (A.) japonicus* も新種として記載されている。中根先生宅にお邪魔していたある日、当時岐阜におられた大林 (一夫) さんが訪ねて来られた。*Aphodius* の話になると、是非採りに行きましようということになり、両先生を案内して再度、武平峠へ登った。峠に着くやいなや、中根先生、しきりに鼻をうごめかし、「こちらだ」と一言、樹林中にはみごとな一山の人糞。大林さん、それを見て「中根君、僕にも半分わけて下さいよ」と。真ん中で半分にわけた人糞の山から、御両所、目的の *Aphodius* 2 種をつまんで次々と毒管へ。私も案内してきた甲斐があったというものであった。

この頃の先生は、各地の甲虫屋さんをよく訪ねられていた。私も時々お伴をして岐阜の大林さんや名和 (正男) さんを訪問したり、関西の大倉正文さん、林 匡夫さん、伊賀正汎さんのお宅へお邪魔し、関西流の美しいつくりの標本を前に虫談に加えてもらったりした。新婚早々の大倉さんのところでは、たまたま戸澤信義先生にもお会いすることができた。戸澤・大倉・中根のお三方でなにやらヒソヒソ話になり、戸澤さんが私に「君はまだ子供だから、あちらへ行っておれ」と追い出されたことが妙に記憶に残っている。思えば、ここまで登場した方は、穂積さんを除いてすべて鬼籍に入られてしまった。まことにさびしい限りである。そして、私も知らぬ間に年をとったと感ずるこの頃である。

その頃、私はコウヤホソハナカミキリの変異を調べていたが、上翅に 4 黄帯をもつ個体があるのに気付く、中根先生に話したら、「もしかしたら、コウヤは Pic の書いた *Leptura harmandi* ではないか。林さんの意見も聞いてみたら」と言われたので、これまで調べたことを林さんに報告した。直ちに長文の丁寧なコメントと Pic の原記載をタイプして送って下さった。結果は近畿甲虫同好会々報 (昆虫学評論の前身) 2 巻 3 号 (1947) に出してもらった。この報告は大林さんからほめられて嬉しかった思い出がある。しかし、結論は間違っていて、その後大林さんによって *harmandi* はヤツボシの 1 型で、コウヤホソとは別物であることが立証された。林さんとはそれ以後お会いする機会がなかったが、数年前からオサムシニュースレターをお送りしていた。コブヤハズを DNA で調べたら面白いのでは、という感想をいただいたことがある。近々、遠山雅夫さんらが分析を始められると聞いているが、その結果を待たずに林さんが亡くなられたのは、まことに残念であった。

やがて、私は名古屋大学理学部生物学科へ進んだ。1 年余りの環境医学研究所への間借り生活も終って、新築の生物学教室 (木造 2 階建て) と、木造平屋の 2 室だけの別館が出来上がった。私は虫が好きということからその別館の一室に中根先生と同居することになった。この頃、先生は日本昆虫図鑑の改訂版で甲虫の部を受け持たれることになり、私にその一部として、エンムシと大型のデオキノコを分担してほしいと頼まれた。このあたりの甲虫は、先生から文献や標本を渡され少しずつ調べていたこともあり、引き受けたものの、なかなか進まない。図の書き方、文献の調べ方など丁寧に教えてもらったが、期日に間に合わず、先生にかなりの部分を追加してもらった。出来上がった図をみると、私の書いたものと先生の作品の差が余りにも歴然としている。描画が虫をやる上での必要条件なら自分は落第だな、と感じたものである。先生の甲虫研究への集中ぶりはすごく、しばしばタイプライターを片手に上京、甲虫の文献を写し、帰りは重い雑誌を借出し、持ち帰ってタイプしておられた。このようにして日本の甲虫の原記載を次々と集められたのである。そして、夜遅くまでビノキュラーをのぞき、図を作り、原稿を書いておられた。「日本でも早く REITTER の *Fauna Germanica* のようなものを作らねば」というのが口癖であった。後年、『新昆虫』や『昆虫と

自然』に「日本の甲虫」を連載されたのも、その意図の表れのような気がする。まとめて本にされたらとお話ししたこともあったが、「次々といろいろ出てくるので、なかなかねえ……」と言っておられた。

先生のところへは、しばしば著名な昆虫学者が訪ねて来られた。中條道夫、朝比奈正二郎、黒澤良彦の諸先生などで、私も紹介してもらうことができた。中條先生の香川大時代には集中講義によっていただき、それ以来変らぬ御交誼をいただいている。また、東京での日本昆虫学会大会にも連れて行っていただき、江崎先生や湯浅啓温先生にもひき合わせてもらった。湯浅先生は「中根君と一緒に日本の昆虫学界のため頑張ってくれ」と激励され、感激した。

採集にもしばしばお伴をした。木曾福島、三河鳳来寺、鳥々谷～上高地等々である。教室の若者が先生を囲んでの上高地行きは、楽しかった。夜行列車で松本へ、鳥々谷を歩き、岩魚止小屋で一泊、徳本峠を経て明神館に泊まり、上高地へと抜けた。明神館を出発する時、先生は右手に捕虫網の出立ちだったが、監視員がやって来て「ここは昆虫採集禁止区域です。網をしまってください」と。

先生曰く、「私は虫の研究が商売だから認めてもらえないか」。この押し問答は勿論、先生の負けであった。

名大での先生の所属の講座は「動物発生学」であって、「昆虫学」ではない。教授の取り計らいで、発生も甲虫も両方やってくれということになっていたらしいので、春になると、三河鳳来寺でモリアオガエルの卵を集め、発生過程を追ってタンパク質のSH基を検出するニトロプルシド反応をやっておられた。幸い(?)にもモリアオガエルの卵が使えるのは、1年間のうちほんの1週間程度なので、残りはすべて甲虫の研究に打ち込まれていた。カエルの方はあまり熱心にやっておられたと言いはないというのが正直な感想である。

大学構内でいろいろなものを見つけて当時の食糧難を補っていた。ヒキガエルの肉、キツネノチャブクロ(ホコリタケ)。これらはバターで炒め、先生も「なかなかおいしいね」と言って喜んで食べておられた。そのほか、オオベニタケやイクチ類の茸汁も作ったが、これはあまり評判がよくなかった。一方、先生は大の甘党で、茶色の皮の「東山マンジュウ」なるものをどこからともなく仕入れて来られた。

スポーツもよく一緒にやった。テニス(軟式)、野球など運動好きの先生は真っ先に出てこられた。日が落ちてボールが見えなくなるまでテニスをやっていたことを思い出す。先生の卓球の腕前は特筆に値する。毎年、理学部内で個人対抗が行われたが、優勝戦はきまって中根先生と数学のYさんであった。先生は攻撃型、Yさんはデフェンス型でなかなか勝負がつかない好試合を展開しておられた。

名古屋時代の後半は、甲虫全般の同定・分類に加え、♂交尾器による新しい分類体系を構築されつつあった。ハンミョウに始まり、オサムシ、ハナカミキリと掘げられたが、これは今や甲虫の分類の手法として定着している。先生の業績の中でも特筆大書すべきものであろう。

私は、その後昆虫から分子生物学(その頃はこの名称はなかったが)へ転向し、中根先生も西京大学(現京都府立大)へ転出され(1951年)、私の集めた甲虫の標本はすべて先生に託した。先生はその後、科博から鹿児島大へ移られ、定年後は宮崎産業大にしばらく在籍後、千葉へ帰られた。そ



1948年8月、信州の鳥々谷にて

の間、私の方は本業の傍ら、虫とは付かず離れずでやってきたが、集めた標本のかかりのものは先生のもとへ送った。私の採集品が新種や新亜種のタイプに指定されたものは広い科にわたってかなりの数にのぼる。その中で *osawai* や *syozoi* と付けていただいたものが 9 種ある。先生の研究に多少なりとも役に立ったと、大変嬉しく思っている。

最近、日本の甲虫研究も進み、いろいろなグループの優れた研究者が輩出しているのは喜ばしい限りであるが、甲虫全般に広く、深く精通しておられた先生の存在は、驚嘆に値するものであった。正に *outstanding* というべきであろう。権力や権威とは無縁で、日本の甲虫研究の基礎を作り、研究一筋に打ち込まれた先生の生き方には深い共感を覚える。謹んで御冥福を祈りたい。

(おおさわ しょうぞう)

甲虫学者 中根猛彦先生と私

佐々治寛之

1999年5月26日、中根猛彦先生が逝去された。悲しい。追悼文を書く気持ちにもなれなかったほどだったのでそっとしておいた。間もなく一周忌となるので冷静に、私なりに中根先生ってどんな研究者だったのかを見つめてみたい。弔辞であれば故人の業績を誉め称えるのが筋道であろうが、中根先生の批判的精神—それは重要な価値があるのだが—を受け継いで書くことにする。

私の虫好きは4才頃にはじまるが、甲虫に惹かれるのは高校時代だろうか。その頃はむしろ遺伝学が発生学に魅力を感じていたが、最終的には系統分類学となる。江崎悌三先生・安松京三先生にめぐり会ったことで九州大学に進学することになるが、もし九大に入れなかったら第2志望として西京大学(現京都府立大学)への道を考えて。中根先生がおいでだったからである。甲虫をやるならば中根先生の所に弟子入りするのが早道だったかもしれないが、九大で基本的かつ広範な生物学、昆虫学を学んだ後に専門分野の昆虫分類学に進むことが正解だったと思っている。

私が大学に入学した頃は家族(母と兄姉妹)は長崎県にいたが、やがて東京に移ったので私は福岡と東京を往復する機会が多かった。その際、京都の中根先生の研究室を訪れるのが通例だった。御存知のように先生の毒舌・批判屋は良く知られている。「〇〇君の論文はひどいよ。君、あれ見たいかい。」「神谷君(佐々治の旧姓)が書くといっていたことをそっくりM君が書いたね。あれはけしからん。第一、君がちっとも書かんからだ。」「いいかい、くずぐずしてるとほくがみんな書いてしまうからね。」。そのような談話のうちあつかましくも昼食をご馳走になり、夕方まで標本や文献を見せて下さり、そうした中で中根さんは(以下、親しみをこめて先生ではなく中根さんと呼ばせていただく)ニコニコの笑顔ながら、痛烈な批判を浴びせつけるのがしばしばだった。皮肉な雑文を書くのがお好きのようだったが、それは善意に解釈すれば、年長者に対しては厳しい批判、我々若僧には愛の鞭だったと思う。学部学生の頃、研究は印刷公刊してはじめて業績になるのだ、知っているだけはだめだ、と新種記載論文を手渡されて、「君も大いに頑張れよ」と叱咤激励する若い頃の中根さんだった。また、もう一つの顔は甲虫すべての分類だと思ふ。それは「新昆虫」、そして「昆虫と自然」に続く『日本の甲虫』シリーズに代表される解説であろう。

中根さんの敬意に価することが2つある。誰でも認めることと思うが、分類群のレパートリーの広さである。そして、日本とその近隣地域の甲虫を集中的に研究対象としていること。全甲虫を調査・研究している人は大勢いる。しかし、専門家として通用する方がどのくらいいるだろうか。河野廣道・三輪勇四郎・中條道夫先生の頃は別として、近年では専門化している。専門分野の判定はむづかしいが、仮に新種の命名記載をした方としよう。見落としがあるかもしれないが、『日本産甲

虫目録』で数えたところ、NAKANEが命名者となった種を含む科が何と70もあった。日本産の甲虫の科は130ほどであるから、その半数以上について新種を書いたことになる。ということは、日本産のすべての科の分類を掌握していることを意味する。これは『日本産昆虫目録』から数えたのであって、台湾など近隣地域のものもかなりあるだろう。中根さんが記載した新種の数は『目録』から単純に数えれば良いが、大変な作業になるので諸賢にお任せしよう。そのような中で、大量の新種命名に迫られたのが図鑑作成であった。「原色昆虫大図鑑(II)甲虫編」(1963, 北隆館)ではそれまで未記載だった種の標本の登載が準備されたので、中根さんを始め多くの研究者が図鑑発行以前に学術論文としての命名記載が必要だった。折角大きな原色の図鑑を作ろうというのだから、この機会に可能な限りたくさん種の盛り込みたい。図鑑は造本上1図版当りの説明文が制限される。したがって、事前に新種記載をしなければならない。学会誌もあるし、大学紀要などで記載すれば良いが、発行日付で図鑑に間に合わない。そこで、中根さんはそれまでも刊行していた“Fragmenta Coleopterologica”で記載を書いた。発行を急ぐためだろうか、記載は簡潔で要を得ている。ただ問題は表示されている日付で本当にしかるべき機関や個人に発送されていたのだろうか。上掲「大図鑑」について指摘しておかねばならないことがもう一つある。それは中根さんだけに限ったことではないが、「大図鑑」発行から15年経った1978年に18頁に亘る追補・正誤表が刊行されたことである。語句や誤った学名の修正、印刷上のミスであれば改版の時に修正が許されるであろうが、種の同定や学名など相当大幅な変更が含まれている。ただある意味では仕方ないことだったかなと思っている。それは、原色大図鑑の性格上1種でも多く登載したいという気持ちが出版社にも執筆にもあるだろうから、標本を揃えるのが大仕事だろう。4名の方で分担しているが、大林一夫氏が1科、野村鎮氏が11科、黒澤良彦氏が6科、残りのすべての科を中根さんが担当している。

「大図鑑」出版の頃(1963)という、私は1961年に日本産ヒメテントウ族のレビジョン(修士論文)を刊行し、それ以前に日本から未知だった Hemipeplidae の発見、日本産クチビルテントウ族のレビジョンを発表して、やっと中根さんの信頼を得ていた。

やがて、私は1962年6月、博士課程中退で福井大学に就職した。それまでの福岡—東京の間での途中下車よりも楽になったし、福井は昆虫学会の支部は近畿であるから、しばしば中根さんの研究室を訪問した。それは中根さんが科学博物館に移られてからも続く。福井大学には理学部も農学部もない。以来は私は一匹狼だ。中根さんが科博に移ってからも度々上京する機会があり、科学博物館に1日をはかける。まず大好きなタマシ科の先達である黒澤良彦さんに会い、仲良し先輩の上野俊一さんの所へ。そして、やはり中根さんの室でかなりの時間を費やす。私自身、後の保育社図鑑で28科を担当したように、いわゆる雑甲虫がレパートリーだったので、当然研究分野では中根さんと競合することになる。

そのような折、北隆館の「新日本動物図鑑、上、中、下」(黒白)の姉妹版ともいべき「新日本昆虫図鑑(黒白)の計画が1983年頃持ち上がった。甲虫部門では中根さんが中心で、全属の検索表と豊富な部分図を含むマニュアルが示されていた。私も若輩ながらその企画の会議に参加したが、北隆館側のプランはあまりにも不用意なもので、結果的にその出版は流産した。

図鑑作りの北隆館のライバルともいべき保育社で、「原色日本甲虫図鑑 I~IV」が1984-1986年に刊行されたことは甲虫屋の皆さん衆知のとおりである。しかし、その中に中根猛彦は著者名としても監修者としても名がない。中根さんには一切世話になったことがないという方もおいでかもしれないが、それほど中根さんは大勢の執筆者の中から何らかの意図的要因によってはざされていた。しかし、現在はそうそうたる研究者でも、若い頃には中根さんの指導によって現今に至った方がおいでだと思う。

中根さんの周囲には秀れた研究者が育っていた。研究業績からすれば日本昆虫学会会長は当然だったろうし、東大出身だからというわけではないが学術会議あたりでも強力な発言権があっても良

さそうだったが、また国立科学博物館の要職にありながらあまりそのような活動をせず、専ら甲虫の記載に努めた晩年だったのであろうか。晩年はただひたすらに新分類群記載をし、それだけではなく和文の論文では厳しい(本人にとっては愉快的)論評を書いて“楽しんで”おいでだった。別刷を私信と共にお送りすると、1頁か2頁の批判と共に感想(他人のものも含めて)を書いてよこされた。中根さんは取りあえず記載しておけば、外国の種などでシノニムになればその時点で処理すれば良いというので、“知られざるもの”はすべて記載するという方針で、標本は遠慮なしに見て欲しい、ただし必ず返して欲しい—という姿勢だった。江崎悌三先生の日本の「昆虫分類学は慎重に国際的なレベルに」というのと松村松年先生の「1年でも早く日本の昆虫相を明らかに」と記載に徹したのと、同じではないが類似がある。ただし中根さんの分類は上位群分類体系について、それまでの日本の甲虫分類学者に比べて精緻であることに注目しよう。

ここで申し上げたいことは、中根甲虫分類学がどんな批判をされようと、今までの業績を見なさいという確固たる自信があることにちがいない。私はその中根方式を学び、そして踏襲したい希望がある。先に、中根さんの敬意に価することが2つあると書いた。その1つは日本産全甲虫の分類であった。もう1つは、中根さんの確信とともに、人としての心遣いだと思う。中根さんの報文にはしばしば前文に“研究者の感想”みたいな序文が付いているが、これは中根さんの意見であろう。ある意味では学術誌として無駄かもしれないが、考えさせる内容がある。それに私自身は全面的に賛成できない部分もあったが、有益なものだった。

昆虫分類学(特に命名に関する論文)の中では客観的な事実だけを記載し、意見は付け足しというのが普通であるが、中根さんはいわゆる記載分類学上の“remarks”以上の何らかの主張を付随されるのが、特に晩年に多かった。また、それは公刊される学術誌の上だけでなく、私信の文面でもかなり強い意見が述べられる。中根さんに別刷を送ると、それに対して必ず単なる礼状ではなく、内容に対する批判が加えられていた。それは、私を研究者として意識して下さっている証拠である。うれしく思った。同様なことが、甲虫界の世界的権威であったクローソン博士からの書簡にいつもあった。中根さんは日本のクローソンだった。

相撲の番付にするならば、かつての江崎悌三・松村松年を東西の横綱とするならば、中根は甲虫部屋の正横綱と認定されよう。横綱とはただ強いだけでなく、人柄・態度に秀れている角士に与えられる称号である。博識であった中根さんの声が聞こえてくる。

「佐々治君、評論のヒゲコメツキダマシ科見たよ。あれね、ぼく知っていたんだ。随分昔に佐藤君や酒井君に標本見せたことがあるんだけどね。」—これは中根さん御存命だった時の架空の声。「ヒラタムシ上科は厄介な群であなたがぼちぼちやってるけど、そんなペースじゃ駄目。」そんな声も聞こえる。「××科のまとめはもうすぐですか。」(佐々治)。「まだ元気だからやってるけど、むつかしくてね。なかなかね!」訃報はそのすぐあとだった。中根さん、ぼく頑張ります。見ててください。(ささじ ひろゆき)

中根先生を偲んで

高井 泰

昨年(1999年)の5月28日の夜、札幌の大原君から電話をもらった。「中根先生がお亡くなりになりました。」という大原君のことばに、「昨年お会いしたときはお元気そうだったが・・・」とやっと答えたが、頭の芯が痺れてきて、電話の声がだんだん遠くなっていく。冷静さを必死に保ちながら、電話を切って我に返ると、痛くなるほど受話器を耳に押しつけていた。

中根先生の研究室へ研究生としてお世話になったのは、1985年度の1年間だったが、それ以前から

同定できない標本を何度か持って行って見ていただいていた。わからないものは何でもかんでも持っていったが、同定していただくことよりも先生にお会いして、いろいろとおもしろいお話を聞くのが目的で、虫の名前がわからないというのはほとんど口実だった。同定の方はたいてい数分のうちに済んでしまうのだが、先生がその時取り組んでおられる虫のことやら、世界の研究者の話など、駄洒落や顔つきなどの物真似を交えて、おもしろおかしく話してくださったので、何かと話の糸口を探しては、長居をした。同定をしていただく間は、たいてい机の上などに置いてある標本を、別の顕微鏡で見せていただくようになっていた。それらの標本についてお尋ねすると、書きかけの図やら記載やらを、気軽に見せて解説してくださった。また沖縄から帰られた時には、「見てみるか」といたずらっぽい笑顔で箱を差し出された。中にはひとつがいのヤンバルテナゴガネが入っていて「へっ」とうれしそうに、琉球大学でもらったのだと種明かしをしてくださった。尊大さの微塵も感じられない先生だった。

生物研究会（サークル）の合宿では南西諸島へ出かける機会も多く、2年生の時にいった沖永良部では大きめのナガタムシが採れた。ナガタムシの同定はさっぱりできず、放ってあったが、いつまでもわからないままでも困るので持って行ったところ、見ておくよと言われ、2週間ほどして廊下でお会いしたら記載しておいたからと言われて、びっくりした。初めて *takaii* という種名を見た時はうれしくて、翌年の一年間図のコピーを下宿の郵便受けの表札代わりに貼っておいた。

研究生時代には、これを記載するようにと4月にヒメヒラタハネカクシの標本を預けられた。秋の初め頃、学生の実験室で皆でお茶を飲んでいたとき、先生が突然もうすぐ原稿の締切だが、あれはどうなったと言われて、私は顔から血の気が引いた。実は箱をいただいたものの、1、2度見たっきりで、まさか紀要に載せるとも思っていなかったもので、まったく手を着けていなかった。全然やってませんとも言い出せず、とにかく締め切りまでの2週間、必死に顕微鏡を覗いた。締め切り前夜は、先輩の松井氏も助けてくださって、朝までかかって下書きを英訳した。今となっては懐かしい思い出である。

先生は新種を1つ書けばよいと仰ったが、結局5新種を区別した。ところがそのうち日光産の3種は、先生ご自身が1本の本で採集されたものだった。大丈夫かなーと仰ったが、やはりそのうちの1種は後でシノニムになってしまった。他に1種もシノニムになったので、お詫びしたら、よくあることだと笑って励ましてくださった。もっともそれ以上に申し訳ないと思うのは、わずか2週間でやったためにたいへん雑な内容になったことだった。厳しいお手紙をくださった研究者の方もおられたが、すべて私の責任である。

先生が書かれた物を読むと、時に研究者に対して厳しい表現もあるが、われわれ学生にはたいへん優しくした。とにかく私のような間抜けな学生にも一度も怒られたことはなかった。一度タイプシリーズになるはずの標本の上に、うっかりピンセットを落として壊してしまった。今度こそ怒られるものと覚悟をしてお詫びに言ったら、わざとやったわけじゃないのだから仕方がないじゃないかと笑って仰った。その後教員になった私にとって、ひとつの物の見方を与えていただいたひとこまだった。

先生はたいへん人に気を遣う質で、恐らく鹿児島時代も、実習を除けば学生と一緒に採集に出られたこともほとんどなかったのではないと思う。実習で足を怪我されてからは、採集には常に奥様がご一緒され、学生と一緒にという話は聞いたことがなかった。お悔やみにいった時に奥様から人に気を遣わずにおれないためだったとお聞きした。弟子を持たない主義だと伺ったことがあるが、そんな性格も関係していたのかも知れない。特定の弟子はなかったかも知れないが、全国の多くのアマチュア研究者から慕われていたのは紛れもない事実だろう。

私達が毎年合宿へ行き、それなりに採集していたつもの栗野岳温泉でも、1本の朽ち木から2種のオオキノコの新種が採れたよ、などと愉快そうにお話しされたことがあった。一度でいいからそ

んな先生の採集を拝見したかった。直海博士の追悼文で、採集にご一緒されたお話を読んで、私はたいへんうらやましく思った。

先生から伺ったお話は数限りないが、いくつか書き留めておくことにする。

何時だったか、「日本はアマチュアも含めて世界でも昆虫の研究者が多い国なのに、どうして日本語で論文を書こうとしないのかね」と言われた。「記載や要約を欧文で付けておけばよいのだから、もっとどんどん書けばいいのに」と続けられた。日本人はもっとプライドを持ってという意味だったのか、あるいは横文字の苦手な私を励ましてくださったのだろうか。このお話とセットだったかどうか、定かではないが、何かの記載をするときに同じ仲間の英国人の記載があったので、その単語を入れ替えただけの記載を作って送ったら、学会のレフェリーが英文にこんな表現はないと言ってきたとお聞きした。

先生の若い時代は論文をコピーするのにタイプライターで写したので、否が応でも論文を読んできたが、「今の若い人たちは機械でコピーするので、よく持っているが読んでいない。君もそうだろう」と言われて、冷や汗をかいた。鹿児島を離れる時に、思い出にと先生がタイプや写真で複写された文献をいくつかいただいた。中国には井戸の水を飲むときには、井戸を掘った人のことを思い出せという諺があると聞いたが、先生ご自身も、先達の業績は大切にされていた。何かの時に「若いときはよく名前を消したが、見直してみると案外そうでなかったということもあった。やはり区別をしたということは、何か根拠があるので、最近はやほど確信が持てないと消さないようにしている。特にPicさんのように記載が簡単でも、たくさんさんの標本を見ている人が付けた名前は侮れない」と話された。

ある時は、「記載は正確に意味さえ伝わればよい、虫を記載する観点は、人それぞれに違うのだから、論文の内容も書く人ごとに違ってよい」と仰った。これも私の不勉強を哀れんでのことだったのだろうか。

在職中は、文献を職場用と自宅用に同じ物を 2 組用意しておられたが、最後に退職された時に不要になった文献は売り払われたとお聞きしている。私がいつも物欲しげに見ていたもので、そういえば君に安く売ってあげれば良かったなどと笑って仰った。その後出てきた古いコピーなどは積んであって、欲しい物は全部持って行きなさいと仰っていただいたので、お言葉に甘えてきた。また標本でも、奄美に行ったけれど目的のマルダイコクは採れませんでしたと言うと、「それじゃあ、あげよう」と笑いながら 1 頭下さった。千葉のご自宅に伺ったときには、同じようにキイロホソゴミムシをいただいた。他にも何度か厚かましく標本を頂戴したが、手元に余裕あれば気軽にくださった。

数年前、先生のご自宅にお邪魔した際、そろそろ何かグループを決めてやってみないかと言ってくださった。しかし、私は大学を離れてからの年月を埋める自信が無くて、とてもとてもと申し上げたら、少しがっかりされたようなお顔で、「そうか」とだけつぶやかれた。

一昨年、あるグループについて少し質問したところ、やる気になったかと仰って、これが使いやすいだとか交尾器を出すためのピンセットやそれを研ぐための砥石まで出して来られて頂戴した。昨年の年賀状には、その後どうなったかというお尋ねがあり、ほとんど進んでいなかったのどうご返事したらよいかととまどって、足を運びそびれているうちに思いがけない訃報を受け取ることになってしまった。

ここ数年、お会いした時にはいつも牧野富太郎博士を引き合いに出されて、90歳まで頑張るよと仰っていた。あちこちからあまりに多くの同定依頼が来ていて、断っても来るんだとこぼしながらも、来ちゃったものは仕方がないからねと黙々と同定に取り組んで来られた。アマチュアの依頼でも、1頭1頭確かめては同定しておられた誠実な姿は忘れることができない。いつだったか、holotypeを見たいのだが、博物館に問い合わせても全然帰ってこないとかぼしておられた。「タイプを見るのに十年近くもかかるかねえ、まあやることは他にもいっぱいあるからいいんだが」と少しだけ残念

そうに仰っておられた。

私は自分の分の同定は、後回しでけっこうですと申し上げていた。「いつまでたっても暇にならんよ、それでもいいか、そのうち間に合わなくなっちゃうぞ」と笑っておられたが、とうとうそれが現実になってしまった。

先生は日本の甲虫を1種でも多く、命名してわかるようにとひたすら走り続けられた。私が研究生をさせていただいたのは、退官前の最後の1年だったが、その頃でも時々のご自宅で朝方まで顕微鏡を覗いておられた。そんな翌日はお疲れの様子だったので、早々に退室しようとする時、いいからいいからと仰って話し相手になってくださった。千葉のお宅では、ガラスの入れ物に氷砂糖が入れてあって、時々それを口に放り込みながらお話をしてくださった。その氷砂糖が、先生の寿命を縮めているとは気づかなかったことが、今となっては悔やまれる。近年目が悪くなられていたが、「物が縦長に見えるんだよ。横にすると縮んじゃうんだな。でね、斜めにするとちょうどいいんだ」などと笑い飛ばして、「そのうち治るだろう。そしたら君の持ってきた小さいのも見るよ」と仰っておられた。「日本昆虫図鑑」(北隆館)の全形図はもちろんだが、走り書きでも見事な図を描かれた先生だったので、遺稿のスゲハムシ類の交尾器の図を見た時は、これほど悪くなっていたのかとショックだった。最期は、眠るようにして安祥として逝かれたことが、私にとってはわずかな慰めである。

先生がいろいろな方と確執があったことは知っている。そのそれぞれの原因については、くわしくは存じ上げないが、不誠実な人物に対しては厳しかったように思う。また、物事についてははっきりと意見を述べられるところもあったようだから、そのせいだかも知れない。一方でその闘争心がなければ、あれだけの業績は残せなかっただろう。大原君の集計では多い時には1年に45編もの論文をだされたとのことである。

とりとめなく長々と書いてしまったが、親しく教をいただいた19年は、私にとって何物にも代え難い年月だった。先生のご冥福を信じて、筆をおくことにしたい。

追記：甲虫ニュース(127/128)の佐藤博士の追悼文の中に「怪文書レタカルチョ云々」という部分があり、覚えがあったので手元のコピーを探して見てみたが、これは「ひろば」という機関紙の持ち回り連載のようで、その34号に掲載されたものであることがわかった。「評学事始」というタイトルからすると連載の第1回だったのかも知れない。「ひろば」は手元にある49号の題字の部分によると京都府職員労働組合京都府立大学支部情宣部が発行していた物のようである。ついでだが、33号には京都府人事委員会委員長に先生が支部代表として提出したベースアップ措置要求書が掲載されている。(たかい やすし)

ケブカヒラタゴミムシの分布について

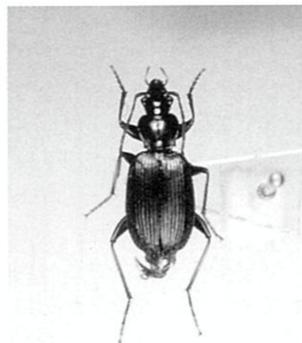
森 正人

〒651-1432 西宮市すみれ台 2-2-5

ケブカヒラタゴミムシ *Rupa (Rupa) japonica* JEDLICKA, 1935は、大阪府金剛山産の標本に基づいて記載された特異なヒラタゴミムシである。HABU (1978)は本種の分布域として三重、大阪、奈良、和歌山の各府県をあげており、また近畿甲虫同好会(1955)、坂本(1984)、関西甲虫談話会(1997)では京都府下からも記録し、近畿地方の中南部を中心に分布すると考えられていた。近年、KASAHARA (1994)は従来の分布域を離れた産地として岡山県の数カ所から本種を記録し、岡山県産の個体群を亜種(*ssp. uncinata*)として記載した。この岡山県亜種は雄の交尾器先端部が特に細長く湾曲することが基

亜種との違いとされている。この形質に着目して手許にある各地の雄個体標本の交尾器を調べたところ、両タイプにはほぼ明瞭に区分された(図 1)。また、これらの産地をプロットすると図 2 に示すような結果となった。つまり、基亜種型の分布は紀伊半島から滋賀県南部に及び、岡山亜種型は予想に反して近畿北部を東に延びて三重県内にまで達すると推定された。

検した雄標本の記録を下記に示した。なお、鳥取、兵庫、福井及び滋賀の各県からは初記録と思われる。特に明記のない記録は筆者自身の採集である。



ケブカヒラタゴミムシ♂
亀山市産

1. 鳥取県八東町扇ノ山 19-X-1996; 2. 兵庫県大屋町横行 13-VIII-1999; 3. 京都府美山町佐々里峠 23-VIII-1995; 4. 京都市峰定寺 15-X-1995; 5. 福井県上中町河内 22-V-1999 (北山昭採集); 6. 三重県亀山市野登山 5-IX-1999; 7. 滋賀県栗東町金勝山 16-V-1989; 8. 滋賀県大津市桐生辻 23-V-

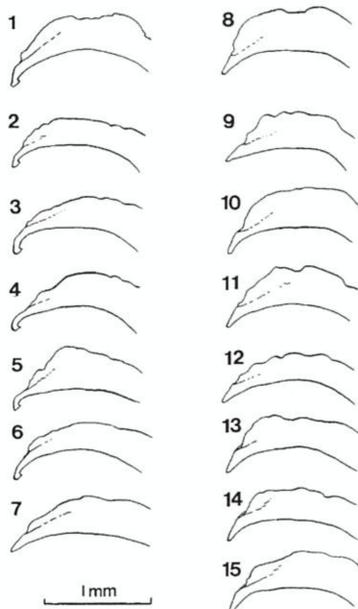


図 1. 雄交尾器先端部形状
番号は産地番号に対応

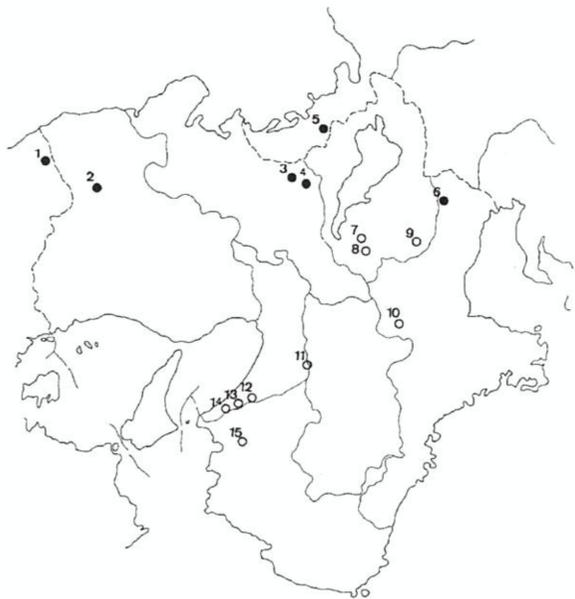


図 2. 雄交尾器の区分による記録地点 (●: 岡山亜種型 ○: 基亜種型)
番号は産地番号に対応

- 1998; 9. 滋賀県土山町山女原 27-V-1988; 10. 三重県美杉村大洞山 13-XII-1997; 11. 大阪府金剛山 23-V-1967 (朝田武雄採集); 12. 大阪府貝塚市高城山東部 9-X-1999; 13. 大阪府泉佐野市高城山 31-X-1998; 14. 大阪府泉南市童子 18-V-1987; 15. 和歌山県生石山 21-III-1971 (朝田武雄採集)。

これにより、本種は近畿地方全県と隣接する北陸と中国地方の一部に広く分布していることが確認され、亜種間の分布域についてもある程度の推定が出来たと考えられる。今後は分布の希薄な兵庫県南部や大阪府北部における情報を加えて、より正確な分布の境界を調べる必要がある。最後に、標本を検査する機会を頂いた北山昭、故朝田武雄両氏にお礼を申しあげる。

参考文献

- JEDLIČKA (1935). Acta Soc.Ent.Csl.,32:32-33
 HABU,A.(1978). Carabidae:Platynini (Insecta:Coleoptera).Fauna Japonica.
 坂本繁夫(1984). ケブカヒラタゴミムシ京都府の記録, 月刊むし(158):32
 近畿甲虫同好会 (1955). 「原色日本昆虫図鑑(上)・甲虫編」
 KASAHARA,S.(1994). A new subspecies of *Rupa japonica* (Coleoptera, Carabidae) from Okayama Prefecture,Western Honshu, Japan.
 Elytra, Tokyo, 22(2):237-238
 関西甲虫談話会(1997). 京都府産オサムシ科および近縁科甲虫目録

(もり まさと)

虫屋の広場 (28)

地域別総合甲虫目録[IX]

◎ 区市町村単位目録・小地域目録(その6)

01. 岡山県倉敷市
青野孝昭 (2000), 倉敷市由加山系の昆虫 [チョウ目・コウチュウ目], 「倉敷市由加山系全域の自然」(倉敷の自然をまもる会), 151-204. Figg. コウチュウ目目録: 161-189. [61科, 509種]
02. 岡山県新庄村
青野孝昭 (1999), 岡山県真庭郡新庄村土用ダム地区の甲虫類, 岡山県自然保護センター研究報告, (7), 1-44. [73科, 793種]
03. 北海道倶知安町
佐々木邦彦(1999), 北海道倶知安町の甲虫類(I), jezoensis, (26), 113-126. [28科, 256種]
04. 北海道岩見沢市
二口毅(1999), 岩見沢市に於ける採集記録, jezoensis, (26), 145-154. 鞘翅目: 157-163. [24科, 112種]
05. 北海道栗沢町
二口毅(1999), 栗沢町の採集記録, jezoensis, (26), 155-163. 鞘翅目: 157-163. [23科, 101種]
06. 福岡県飯塚市
山脇好之(1999), 笠置山(飯塚市)の鞘翅目(17), Kasagi, (9), 123-138. [484種](合計)[1455種]
07. 愛媛県内海村
酒井雅博ら(9名) (1998), 愛媛県南宇和郡内海村の昆虫類 (I), 愛媛大学農学部紀要, 42(2), 167-190. コウチュウ目: 176-186. [62科, 395種]
08. 横浜市栄区
円海山域自然調査会(1993), 「40 ha の昆虫調査—1年間の調査が語るもの— 横浜市栄区上郷町上郷開発事業関連区域昆虫調査報告書」, 108pp. 12pll. 昆虫目録: 79-107, コウチュウ目目録: 85-104. [94科, 1454種]
09. 愛知県美和町
穂積俊文 (1992), 間野隆裕氏が灯火採集で得た愛知県美和町の甲虫類, 佳香蝶, 44(171), 33-38. [27科, 130種]
10. 愛知県弥富町
穂積俊文 (1991), 間野隆裕氏が灯火採集で得た愛知県弥富町鍋田干拓の甲虫, 佳香蝶, 43 (166), 17-22. [23科, 116種]

◎ 複数市町村を包含するやや広い地域の目録

01. 神奈川県円海山
円海山域自然調査会(2000), 円海山域の昆虫, 神奈川虫報, (130), 1-458. コウチュウ目, 渡弘:
115-286. Figg. 5-26. [91科, 1649種]
02. (大阪府/兵庫県)大阪湾沿岸
河上康子・稲畑憲昭(2000), 大阪湾沿岸地域における海浜・河口汽水域の地表性甲虫調査, 関西
甲虫談話会資料, (16), 1-26. [23科, 188種].
03. 兵庫県淡路島
高橋寿郎(1998-1999), 淡路島産甲虫目録(1-2), PARNASSIUS, (47), 1-10. [17科, 145種]; (48),
1-16. [44科, 235種], (総計)[61科, 380種]
04. 福島県南部
大桃定洋(1988-1999), 県南地方の甲虫分布資料(その1-7), ふくしまの虫, (7), 10-12; (7), 13-
15; (8), 5-8; (11), 3-5; (12), 86; (13), 9. (総合計)[61科, 431種]
05. 茨城県南部
ミュージアムパーク茨城県自然博物館(1998), 「茨城県自然博物館第1次総合調査報告書—筑波
山・霞ヶ浦を中心とする県南部地域の自然—」コウチュウ類: 平井剛夫; 258-272. [59科, 606
種]
06. 北海道東部
A. 飯島一雄(1998), 「釧路市立博物館収蔵資料目録(XVIII), 昆虫標本目録(5)」(釧路市立博物館,
49pp.), 鞘翅目: 14-42. [7科, 179種](若干の他県産を含む)
B. 飯島一雄(1996), 「釧路市立博物館収蔵資料目録(XVI), 昆虫標本目録(3)」(釧路市立博物館,
53pp.), 鞘翅目: 7-34. [8科, 103種](若干の他県産を含む)
07. 滋賀県琵琶湖岸
初宿成彦(1997), 琵琶湖岸の砂浜環境における甲虫相—海浜性甲虫の分布—, 自然史研究, 2
(13), 181-194. [15科, 89種]
08. 富山県射水丘陵
北村征三郎(1996), 呉羽・射水丘陵昆虫調査(1993年-1995年), 甲虫目録, AMICA, (34), 36-
56. [47科, 252種]
09. 鳥根県斐伊川水系
建設省中国地方建設局出雲工事事務所(1994), 「斐伊川水系の昆虫」200pp. 昆虫目録: 84-195.
甲虫目: 98-115. [513種]
10. 宮城県加護坊・窺岳山
高橋雄一(1994), 加護坊・窺岳山環境保全地域の昆虫相, 「加護坊・窺岳山環境保全地域学術調
査報告書」(宮城県), 163-199. 昆虫目録: 164-190, 甲虫目: 166-176. [30科, 168種]
11. 宮城県県民の森
郷右近勝夫(1993), 県民の森緑地環境保全地域における昆虫相, 「県民の森緑地環境保全地域学
術調査報告書」(宮城県), 107-159. 昆虫目録: 110-131, コウチュウ目: 112-117. [25科, 106
種]

◎ 都道府県単位目録

[千葉県]

- 千葉県生物学会(1999), 「千葉県動物誌」(文一総合出版, 1248pp.). 鞘翅目: 山崎秀雄; "千葉県
の鞘翅目"ほか, 475-751. [101科, 2257種]

同じ関東地区の神奈川県や埼玉県には及ばないものの、最高標高が500mに満たない県の目録としては驚異的な種類数がまとめられている。関係諸氏の永年にわたる熱意が豪華な書籍として出版されたことに拍手を送りたい。ただ装丁が豪華であるだけに価格も安価でなく、広く活用を期待するならば愛知県や岡山県の目録のように質素な仕立てにして価格を抑え、図書館向けだけでなく個人購入のし易いスタイルを狙ったほうが普及しやすいように思われる。

[鳥取県]

○宮武頼夫 (1996), 「青木 浩 昆虫コレクション目録」(大阪市立自然史博物館収蔵資料目録, 第28集), 132pp. 4col.pll. コウチュウ目: 32-87. [21科, 665種] (若干の他県産を含む)

[山形県]

○山形県立博物館 (1994), 「山形県立博物館収蔵資料目録, 動物資料目録2,(昆虫, I)」, 144pp. コウチュウ目: 1-61. [52科, 410種] (若干の他県産を含む) (水野弘造)

会 報

4月例会(2000年)の報告

2000年4月2日(日), 大阪市立自然史博物館に於いて開催された。午前中は自由懇談, 午後より伊藤 昇氏の司会でプログラムの進行に入り, 昨年本会会長に就任された佐々治寛之氏よりの御挨拶が行われた。次に会務報告(会計報告, 昆虫学評論およびねじればねの編集状況, 海外の学会と交換文献の紹介とリスト作り, 剣山及び和佐又山の採集会案内, 佐々治寛之先生退官記念事業の趣意説明など)の後, 北山 昭氏(環境科学KK)による「ゲンゴロウ図鑑その後」と題しての講演があった。図鑑の発刊後に発見されたゲンゴロウのカラーズライドによる詳細な解説が行われた。その内容については後日ねじればね誌上に解説文の掲載をお願いしているので御期待下さい。その後参加者全員による一人一話がなごやかな雰囲気で行われ, 午後4時半閉会した。

秋田勝己 林 靖彦 市橋 甫 稲垣政志 稲畑憲昭 伊藤 昇 官能健次 河上康子 北山 昭 松田吉弘 三木三徳
水野弘造 生川展行 野村英世 斎藤昌弘 佐々治寛之 塩崎明生 初宿成彦 谷角素彦 横関秀行 吉田正隆
[出席者(アルファベット順)] (野村英世)

会費納入のお願い

本学会の会費は前納制です。会員各位の会費納入状況は封筒の宛名の下に記入してあります。2000年度（第55巻分）会費5000円を未納の方には振替用紙を同封させていただきましたので、早急にお納め下さい。また、従来発行していましたが、領収書（会員証）は事務処理の軽減と経費節約のため今後は発行しませんが、必要な方はその旨御連絡下さい。したがって、振替用紙の控は領収書として保存願います。会費について何か不明な点がありましたら、会計（野村英世）まで御連絡下さい。

(運営委員会)

発行：2000. 6. 15 日本甲虫学会
 (本部) 〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園 1-23 大阪市立自然史博物館・昆虫研究室気付
 振替口座: 00990-8-39672 URL: <http://www.mus-nh.city.osaka.jp/jcs.html>
 Tel: 06-6697-6221 Fax: 06-6697-6225 E-mail: shiyake@mus-nh.city.osaka.jp

昆虫学評論原稿送付先 (英文)
 〒666-0116 川西市水明台 3-1-73 林 靖彦 Tel. 0727-93-3712
 E-mail: hayashiy@silver.ocn.ne.jp

ねじればね原稿送付先 (和文, E-mailでの投稿を歓迎します)
 〒611-0002 宇治市木幡熊小路 19-35 水野弘造 Tel.(Fax) 0774-32-4929
 E-mail: kzmizuno@oak.ocn.ne.jp

〒614-8371 八幡市男山雄徳 8 E7-303 伊藤建夫 Tel.(Fax) 075-983-3491
 E-mail: itokyoto@gb3.so-net.ne.jp

入会及び会費問合せ先 (年会費 5,000 円, 入会金は不要)
 〒590-0144 堺市赤坂台 1-18-5 野村英世 Tel. 0722-98-4066